

ミラノのヴィジョン⁽¹⁾

—Confessiones VIIに於ける聖アウグスチヌスの神秘経験—

加 藤 武

(一)

問題の所在

告白録第9巻⁽²⁾にアウグスチヌスはその母モニカとともにオスチャで味わった神秘的な経験を忘れがたく麗わしい筆致で描いている。ところが告白録第7巻においても、オスチャのときほど鮮かでないにしても、神秘的と思われる経験を、3回にわたって述べている⁽³⁾。即ちミラノで、ヴィクトリヌスのラテン語訳を介して「プラトン派の或る書物」を読んだ直後にこの特別な体験をえたと言うのである。この小論ではその中の後者、ミラノの⁽⁴⁾経験だけを綿密に取扱うこととし、次の二つの問題を考えてみたいと思う。

1° ミラノの経験の記述は果して若き日の体験を忠実に写した自伝的報告⁽⁵⁾であろうか。それともみずからは経験しなかったものを、ヒッポの司教が告白録をしたために当って、あたかも体験したかのように、一般的に表現した「現象学的」記述⁽⁶⁾（マルー）であるのだろうか。

2° たといそれが体験に基づくとしても、その体験を「神秘経験」と名付けることが正しいであろうか。それはむしろ「非空間的な神を初めて識った彼の驚きと歓喜、眩惑」ではあっても「神秘経験を考える必要なく充分解釈出来る筈」⁽⁷⁾（大庭征露教授）であろうか。

(二)

記述の真実性

以下告白録の原典本文に即して註解をほどこしつつ精密に検討をしてみよう。

- (i) «Et inde admonitus redire ad memetipsum, intravi in intima mea, duce te, et potui, quoniam factus es adjutor meus» (Conf, VII, 10, 16)⁽⁹⁾

クルセルは聖書からの引用は大部分がヒッポの司教が解釈を加えたとみ⁽¹⁰⁾ており、事実その様に思われるけれども、このプロチノス風の直観が、神⁽¹¹⁾の扶助に支えられたと述べていることは深い意味をもつ。全般的に見てアウグスチヌスは中心をなす体験を、聖書の枠に嵌めて表現しているけれども、そこには単なる修辭的引用にとどまらない重要な司教の解釈が籠め⁽¹²⁾られている。

- (ii) «Intravi et vidi qualicumque oculo animae meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem incommutabilem» (Conf, VII, 10, 16)

「光を……見た」。 (vidi……lucem) オスチャになると、もっとキリスト⁽¹³⁾教的色調が強いが、ミラノでは、知的であり、プロチノスの影響が支配的である。聖書の神の声を聞くかの如き口吻もあるが («tamquam audirem vocem tuam……» Conf, VII, 10, 16), ミラノの体験の中心は「見る」⁽¹⁴⁾であって「聞く」ではないであろう。

- (iii) «Atque ita gradatim a corporibus ad sentientem per corpus animam atque inde ad ejus interiorum vim, …… atque inde rursus ad ratiocinantem potentiam, ad quam refertur ad judicandum, quod sumitur a sensibus corporis, quae se quoque in me comperiens mutabilem erexit se ad intelligentiam suam……» (Conf. VII, 17, 23)

「段階を辿りつつ」⁽¹⁵⁾ (gradatim) この上昇の過程をクルセルは次のように

見る。「神への上昇の手続きが聖アウグスチヌスの終始、徹頭徹尾文学的所産に基づいているようにみえることは確かだ。」⁽¹⁶⁾けれどもこの、プラトンのイデア論的登高にならう過程は、アウグスチヌスにとって単なる修辭的表現にとどまるものであろうか。それはあくまで中核的・本質的な役目をもつ方法なのではあるまいか。ミラノの経験に続くカッシキアム時代、⁽¹⁷⁾いかに多くこの上昇の過程が描かれているかを思い見るべきである。その典型的箇所は Solil. 1, 12, 23 である。だから私はケイレが次の様に言うことに賛成である。「哲学はそこでは疑いもなく大きな役割を演ずる。……かくの如くにこの観想は充分秩序付けられており、方法的である」⁽¹⁸⁾。ただこの登攀の表現は硬く固定したものでなく、微妙に揺れ動いている。

(iv) «…et peruenit ad id quod est in ictu trepidantis aspectus» (Conf. VII, 17, 23) 「不安におののく視力が衝撃をうけたときに在るものにと到達した」(試訳) ラブリオル・トラビュコ・ダンディイ・ピュゼー・ウォットゥ・シール・マイヤーなど、いずれも直観の能動性を窺わしめる訳をつけているが、クルセルは «un choc reçu» と訳すことを主張してラブリオルの次の訳出に反対している。«Elle parvint enfin à l'Être lui-même, dans l'éclair d'un regard frémissant »。ここで、能動・受動いづれに解するかはこの文脈のみからはにわかには決定しがたいが、オスチャの場合にも «attigimus eam modice toto ictu cordis» (Conf. IX, 10, 24) と述べている点でこの ictus という語が強烈な体験を表現していることは疑わない。

(v) «……et nondum me esse qui viderem……» (Conf. VII, 10, 16) 「まだ」(nondum) ふさわしくなかったと言う。さきにあげた知的な登高——ディアレクティケー——とならんで大切なのは浄化である。浄化はクレメンス⁽²⁰⁾においても、プロチノス⁽²¹⁾においても重んぜられているが、意志の問題が真剣に考えられているアウグスチヌス⁽²²⁾において一層深刻である。

(vi) «Et reverberasti infirmitatem aspectus mei radians in me vehementer……» (Conf. VII, 10, 16)

大庭征露教授は「激しく光を照らして我が弱き視力を退けたということは、或意味で感覚的なヴィジョンであるとするならむしろよく当てはまる表現であるが、かかるものでないことは勿論であるから、これはネルレガルドの言う如き体験の表現としてはむしろ不適當である。『我を受入れて我に見させる』という如き詳細な表現はかかる体験にとってあり難きことである。かかる内容の豊富な神秘的体験が当時のアウグスティヌスにあったとは頗る考え難い問題である」と述べておられるけれども「詳細な表現」が用いられ、比喩が使われることかならずしも、その表現の奥に真正の体験が存することを否定するものではないのではあるまいか。比量知的概念による表現を超越する内容をあえて語ろうとするとき、ひとは比喩的表現に托しはせぬであらうか。「ところでイメージは少くとも我々を具体的なものの中に留めて置くという長所を持つ」（ベルグソン）。プラトンが善のイデアを語らんとしたとき、⁽²⁴⁾洞窟の比喩に赴いたこと、プロチノスが一者を説かんとするとき泉の湧水に比喩を借ったのは、⁽²⁵⁾こうした事情に由る。アウグスティヌスが登攀に当って「幻想の群」をきびしく斥けているにもかかわらず、「光を放って」（*«radians» Conf. VII, 10, 16*）「あたかもあなたのみ声をきくかの様に」（*«tamquam audirem vocem tuam» Conf. VII, 10, 16*）というような比喩、黙示的表象を豊富に用いていることは奇異であり、注目されてよいことであらう。比喩は、もともと象徴であるから字義通りとすることは誤りである。（*«etsi non isto modo et his verbis, tamen, domine, tu scis……» Conf. IX, 10, 26*）しかし字義の奥に、比喩によらなくては語ろうとしても語りえぬ秘義的体験が存したことを、このような^{スズ}文体で語っているのではないか。かく解するとき、J・フォンテーヌが次のように言っているのは心ゆくことと言わねばならぬ。「ミラノとオスチヤの高き瞬間は、あまりにも人間的な、言語の無力さを、類比の迂回によって、乗越えようとする彼の試みのむずかしさを、特にきわだたしめる限界⁽²⁷⁾状況に他ならない」。

*

ここまで、原典本文について註釈を加えつつ、一々検査してみると、これが文学的創造でも現象学的記述でもなくて、なんらかの体験に基づいているということを確認できたと思う。

(三)

神 秘 体 験 か

次に、いまわれわれが第Ⅲ章の結論として取り出した「なんらかの体験」を、厳密な意味で「神秘経験」と呼ぶことができるかどうかを論究してみたい。

神秘的であるとみる人々と、神秘的でないとみる人々とに意見が現在分れている。

アンリはミラノの経験は、オスチャのそれと比べるなら、なお知的、形而上学的であるが、「すでにここに神秘的な要素が始まっている⁽²⁸⁾」と言っている。クルセルはアンリの此の意見に賛成しつつ「経験はそれゆえ成功に始まって苦しい失敗に終わった⁽²⁹⁾」と述べ、ボワイエはさらにこの考えを一歩進めて「それどころかこれは大成功だった⁽³⁰⁾」とさえ極言してる。

しかしこれらに反対する学者もいる。オメラはアンリ・クルセルの説を⁽³¹⁾ **bold** と評し「誰れの眼にも、全くかけだしの、まだ浄められていないアウグスチヌスに対して、クルセルがあまりにも素朴なオプチズムを帰している⁽³²⁾と映るだろう」と述べ、「しかしそれは厳密に言う⁽³³⁾とエクタシーではない」と言う。ケイレは「私は第16節・第23節の最も美しい頁⁽³⁴⁾でさえ、ごく広い意味にとるのでない限りは、コンタンブラシオンとかエクスターズと称することはできぬ。つまり私にとっては、それは固有の意味では、神秘的でない⁽³⁴⁾」と述べているし、マイヤーも「神秘が扱われている⁽³⁵⁾」⁽³⁵⁾と述べている。

もっとも、このように諸家の見解が分れるとしても「一体、神秘をどのように解するのか。神秘とは何かをあらかじめ定義してかからなくてはならないではないか」と言われるかも知れない。1954年パリで行われたアウグスチヌス国際学会に日本を代表して参加されたH・デモリン師は、その美しい感動的な報告の中で「アウグスチヌスの神秘の研究に際しては普遍妥当な一般的に承認されている神秘の概念がないということが特に妨害と感ぜられる⁽³⁶⁾」と指摘されている。一般的な印象を述べるならば、定義を厳密にせず広く漠然と考える傾向の人々がアウグスチヌスを神秘的と考えている。それは文献学的研究方法をとる学者（アンリ・クルセル・マンドゥーズ⁽³⁷⁾）に著しい。実証主義的研究態度を強くとる余り、本質の観照把握の面において深さを欠くきらいがある点はたしかに被えないが、他面、原典に対する先入主なき態度と沈潜度の深さにおいては、優れている。「しかしこの（神学的）博識も、もしも研究者がテキストそのものを有効に解釈することを許すほど十分に広い、充分確かな文献学的知識をそなえるのでなければ、空しいであろう」と、マンドゥーズは自信のほどを語っている。

さてここで諸家が神秘経験をどのように解しているかを具体的に知るために、二三の代表的見解を紹介してみよう。

比較的に緻密なのはケイレの定義⁽³⁹⁾である。彼は次の三条件をあげる。

- 1° 神を霊的に認識すること。（能動的）
- 2° 愛により神を確実に実験すること。
- 3° この認識と愛とが神に起原をもつこと。（受動的）

また、マイヤーはアウグスチヌス学会の討論中で言っている。「私は一般にもっとも普及している神秘の定義、ヘンドリックスと、彼以前の多くの人々のグラブマン・マレシャル・シンプソンが与えたように《contemplatio infusa》（神授的観想・注的観想）から出発した⁽⁴⁰⁾」。事実この《contemplatio infusa》の概念は、きわめて多くの研究者が用いている。

しかしデュモリン師も指摘されているように「神秘主義の普通行われて
 いる範囲はそのままではアウグスチヌスに適用されない⁽⁴¹⁾」。だからアウグ
 スチヌスの神秘を判断するに当って、近代のスペインの古典的神秘家の区
 分を当嵌めることには、よほど慎重でなくてはならぬし、余りにも詳細な
 心理的段階に無理矢理嵌めこむことは愚かである。

だからここでは次の簡単な定義—ベルグソンが動的宗教の体験を特色付
 けた—「神秘が辿り着く地点は触接^{コンタクト}をえることである⁽⁴²⁾」を採用したく思
 う。

*

以上に述べた定義に従って、われわれは、ミラノの経験が神との触接で
 ある所以を示し得さえすればよいことになる。

Conf, VII, 10, 16
 Et *reverberasti* infirmitatem
 aspectus mei radians in
 me vehementer

De quantitate animae, XXXIII, 75
 Quod qui prius volunt facere
 quam mundati et sanati fuerint,
 ita illa luce *reverberantur* veritatis.

上の対照表を克明に比べてみよう。内容が酷く似ていることに読者は気
 付かれるだろう。De quantitate animae においてアウグスチヌスは靈魂
 の状態を七段階に分けた。「最後の三つは神秘的意味にのみ解される⁽⁴³⁾」が、
 その第六層のところで「浄められ、癒されるに先立って、それ（真理の観
 想）を試みる者どもは、かの真理の光によって斥けられる」と書き記して
 いる。ミラノにおいてアウグスチヌスは実際まだ浄められていないのに、
 真理を瞥見し、手きびしく斥けられたのである。アウグスチヌスは書いて
 いる。「しかしあなたを味わい楽しむのには余はあまりにも弱くあった⁽⁴⁴⁾」。
 また「光によって」ということも、「斥けられる」という動詞 *reverberare*
 も、全く符号を一つにする。かく言えば「これは観想の経験を一般的に叙
 述したのであって、なんら個人的色彩を帯びぬではないか」と異論があろ
 うかと思う。しかし一般的な記載であることはたしかであるけれども De

quantitate animae が書かれた時期 (387年—388年の冬)⁽⁴⁵⁾ も、かのオスチアの功を奏した経験に続いており、さらに溯ってミラノの経験 (386年6月)⁽⁴⁶⁾ からさして遠くないことから、なお「qui……」と書き綴るとき、あの日の記憶が生新しく想起されて、その人々の中に自分を加えたに違いない。⁽⁴⁷⁾ このように見てくるとき、この一般的叙述という鎧を帯びていたためにこれまで、さしてミラノの経験との結び付きが気付かれずにしまった感のあるこの一節は、まさにミラノのヴィジョンをなお若きアウグスチヌスがみづから評価した重要な箇所であることに気付くであろう。

だから、このアウグスチヌスの自己解釈の光に照らされるとき次の結論を得る。

- 1° ミラノの経験は神秘経験である。
- 2° しかしそれは失敗に終わった。
- 3° されば、それは高度のものとはいえない。(しかしその影響は大きい)

一言以てこれを覆えば、神秘の前味であった。

*

さればそれは神秘体験であるが、とくに触接であることは「光を放って斥け給うた」(reverberasti radians) という文が示している。それはマイヤーのみるような「客観的なザッへへの明晰なアインジヒト」⁽⁴⁸⁾ ではないであろう。この表現は、なにもか動的な、威力を以て抵抗する実在的他者にふれたことを暗に仄かしている。それはプロチヌスが「テオリヤについて」⁽⁴⁹⁾ (Peri physeōs kai theōrias kai tou henos, Enn. III, 8) でくりかえし語っているようなテオリヤとはよほど性質の違うものである。だから Contra Academicos, II, 2, 5 でミラノの経験を次のように描いているその筆の高い調子もこの特質——⁽⁵⁰⁾ 触接——から理解されるように思う。
 «……etiam mihi ipsi de meipso incredibile incendium concitaverunt»。

註

- (1) ミラノの経験をヴィジョンとよぶことに反対する学者(ウォトウキン)もあるが、アウグスチヌス自身 *visio, contemplatio, contactus* などを神秘経験に用いるので、ここではその一つを表題にとった。 *visio*, *Solil*, I, 1, 3, *De libero arbitrio*, 11, 16, 22; *de Cons. Evang*, 1, 8, *De Trin.* XII, 25 *ibid*, 1, 8, 16 *De quantitate animae*, XXXIII, 76 アウグスチヌスの *visio* の用語法は主観的、客観的の両義に用いられる。cf. D. Butler: *The Western Mysticism*, 1951² P.36 n.2
- (2) *Conf. IX*, 10, 24—26 テキストは J. Capello 校訂, マルエッティ版を用いた。
- (3) *Conf. VII*, 10, 16; 17, 23; 20, 26
- (4) «*quosdam platoniorum libros*», *Conf. VII*, 9, 3: «*libri quidam pleni*», *Contra Acad.* II, 2.5, «*Lectis autem Platonis paucissimis libros*» *De beata vita* 1, 1, 4; cf. P. Courcelle: *Litiges sur la lecture des «Libri Platoniorum» Augustiniana*, 354, 1954, P.9ff. P. Henry: *La vision d' Ostie*, 1938, P. 17; J.O'Meara: *The Young Augustine* 1954, P.133 *Augustinus Magister III*, P.98—P.99
- (5) オスチャの経験については従来かなり論究されて来たが、ミラノの経験の方はさほど取扱われなかった。しかし、クルセル (P. Courcelle) が1951年に *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin* の中で詳細にとりあげてから、タイラー、ポワイエ、マルー、ピンケレ、オメラの諸家がクルセルの研究に批判を加え、クルセルはこれらの批判に対して再び答えた。P. Courcelle: *Première expérience Augustinienne de l'extase, Augustinus Magister I* (以下A.M.と略記) 1954, P.53—57 このような最近の活潑な論争に先立って、大庭征露教授はミラノの経験についての優れた研究を、ハルナック、ネレガルドに批判を加えつつ行われた。大庭征露『聖アウグスティヌスに於ける神秘的体験の問題』——*Confessiones VII*, c.10 に関する Harnack の解釈について、探求者第二号1930 なお、『聖アウグスティヌスに於ける神秘思想』カトリック研究, XXIII, 1, 1943 神秘主義特輯号 (以下、前者を『……問題』後者を『……思想』と省略する。) cf. W. Theiler: *Gnomon*, t. XXV, 1953, P.120 (この研究は入手出来なかった。) Ch. Boyer: *Christianisme et néoplatonisme dans la formation de saint Augustin*, 1953², Roma, P.111f., H.-I. Marrou: *Revue des Etudes Latines*, t. XXIX, 1951, P.404—407, これは P. Courcelle: *Recherches……* の書評である。A. Pincherle: *Studi Agostiniani, Rassegna di filosofia*, t. II, 1953, P.27; J. O'meara: *op. cit.*
- (6) P. Courcelle: *Première expérience……A.M. I*, P.54
- (7) 「……私には自伝的な内容の分析であるよりもこの 観 想 の条件の現象学的分析であるように見うけられる」。H.-I. Marrou: *op. cit.* P.403—404
- (8) 『……思想』168頁
- (9) *Ps. XXIX*, 11
- (10) P. Courcelle: *Recherches……* P.160

- (11) Contra Acad. III, 4.3, Solil., I, 1, 2—6, *ibid*, 11, 1, 1, De vera religione III, 3
- (12) 一つにはプロチノスの異教的ミュトスの枠を外すことに意図が働いたのであろう。
- (13) Plotinos, Enn. 1, 6, 9.
- (14) cf. V. Warnach : Erleuchtung und Einsprechung bei Augustin, A.M. I, P. 441 n.1
- (15) 《gradatim》 Conf., IX, 10, 14
- (16) P. Courcelle : Première expérience……, A.M. I, P.54
- (17) De Ordine II, 14, 39, Solil., II, 6, 9—10 cf. De libero arbitrio II, 3, 7—15, 39 : De vera religione XXI—XXXVI, Enarr. In Ps., XLI, 7. Platon, Symp. 210a sqq. Plotinos : Enn. V, 1, 4, Br. P.19, 1—9 ; Porphyrios : Vita Plotini, 23
- (18) F. Cayré : La contemplation Augustinienne, 1953², P.214—215
- (19) P. Courcelle : Recherches……P.223
- (20) Clemens : Stromata, 5, 9, 65, ルブルトン, 十字架の聖ヨハネ「靈魂の暗夜」カトリック研究23.1 note 13の引用による。
- (21) Plotinos, Enn. 1, 8 ; Enn. 1, 6, 5 Br. 101 E. Bréhier : La philosophie de Plotin, 1928 P.150
- (22) Solil. 1, 7
- (23) 『……問題』107—108頁 cf. 『……思想』169頁
- (24) Platon, Resp. VII, tr. par L. Robin ; Bibliothèque de la Pléiade, 1950. P. 1101—1102 P.-M. Schuhl : La fabulation platonicienne 1947. V. Brochard : Les mythes dans la philosophie de Platon, Études de philosophie ancienne et de philosophie moderne. 1954
- (25) 高橋直 : 『Plotinos の Nous に就いて』 静岡大学文理学部研究報告人文科学 No.4, 1953. P.1, È, Bréhier : Image Plotinienne Image Bergsonienne, Les Études Bergsoniennes, vol. II, 1949, P.105—128
- (26) 《subtrahens se a contradicentibus turbis phantasmatum》 Conf. VII, 17, 23, 《Se cui sileat tumultus carnis, sileat phantasiae terrae et aquarum et aeris, et poli et ipsa sibi anima sileant……》 Conf. IX, 10, 25, Enarr. in Ps. XLI, 9. Plotinos : Enn. V. 1, 2, 12—14, Br. 17
- (27) J. Fontaine : Sens et Valeur des images dans les 《Confessions》 A.M. I, P. 120
- (28) P. Henry : op. cit., P.88
- (29) P. Courcelle : Recherches……P.165
- (30) Ch. Boyer : op. cit. P.111
- (31) J. O'Meara : op. cit. P.139
- (32) J. O'Meara : op. cit. P.139
- (33) J. O'Meara : op. cit. P.140
- (34) F. Cayré : Introduction à la philosophie de saint Augustin, P.170
- (35) H. Meyer : War Augustin Intellektualist oder Mystiker ? A.M. III, P.435

- 36 H. デュモリン : 『現代のアウグスティヌス研究の動向』聖アウグスティヌス研究, 上智大学編, 1955, P.292 cf. A.M. III, Discussion, P.168
- 37 ケイレはアンリの神秘に関する定義, 「神に合一しようとする顕著な傾向」を評して「広きに過ぎる」と言っている。 P. Henry : op. cit. P. 86—P. 88, F. Cayré : Initiation……P. 167, マンドウーズとケイレの論争は根本において方法論の相違に帰着する。 F. Cayré : Notion de la mystique d'après Saint Augustin, A.M. II, P.611 n.1
- 38 A. Mandouze : Où en est la question de la mystique Augustinienne ? A.M. III, P.161
- 39 F. Cayré : Introduction……, P.170
- 40 A.M. III, P.168 cf. ジーメス : 『教義学より観たる神秘経験』カトリック研究 XXXIII, 1. P.133 は有益である。
- 41 H. デュモリン : 前掲書 P.297
- 42 H. Bergson : Les deux sources de la morale et la religion, Presses Universitaires de France 1951⁶⁴, P.233
- 43 『……思想』P.158
- 44 «nimis tamen infirmis ad fruendum te» Conf. VII, 20, 26
- 45 D. E Roberts, The Earliest Writings, A Companion to the study of St. Augustine, 1955, P.111
- 46 Recherches……P.280, P. Alfaric, l'Évolution intellectuelle de saint Augustin 1918, P.374, 382
- 47 コレランも同意見であることを脱稿後に確かめることができた。《Augustine could speak personal experience……》 J. Colleran, De quantitate animae, Ancient christian Writers, 1949 P. 214. n.97
- 48 H. Meyer : A.M. III, P.435
- 49 H. Bergson, op. cit. P.234
- 50 結論において私はウォトウキンに賛成である。彼は《touch》《unintelligible intuition》とみている。 E.-I. Watkin : The Mysticism of Saint Augustine, A monument of St. Augustine 1934. P.116, P.116 n.1 さらに又, H. -I. Marrou : Saint Augustine et la Fin de la Culture Antique, 1958⁴, P.183, n. 2 はバトラーが余りにもアウグスチヌスを神秘家することに反対し, ド・ラ・タイユやコモーが余りにも神秘から遠ざけることにも反対し, ウォトウキン, ボワイエに賛意を示していることは衷心から同感である。ただマルーがミラノの経験を自伝的のみぬ点については賛成できないけれども, このいみで私はバトラー, ル・ブロンが余りにもアウグスチヌスの哲学的要素を軽視することに反対である。 D. Butler op. cit. P.61 J.-M le Blond : Les conversions de saint Augustin, 1950, P.228

追記 : 本稿は1957年11月18日三重大学における日本哲学会大会での報告に若干手を加えたものである。